

熊本地震

益城町テント村撤去へ

熱中症 浸水懸念 600人 順次避難所に

熊本県益城町ましきまちは24日、4月の地震後に総合運動公園に開設されたテント村で、寝泊まりしている住民約600人に順次避難所に移ってもらったための準備作業を始めた。猛暑による熱中症などを防ぐための措置で、31日までに終えてテントを撤去する考えだが、利用者から「余震が怖くて建物の中に入りたくない」といった不安の声も出ている。

町は午前9時ごろから、住民受け入れに備えて、テント村の近くにある町総合体育館内の整備をした。

テント村は、登山家の野口健さんや国際医療ポランティアAMD A（岡山市）などが4月下旬、車中泊をしている家族を中心に利用を呼び掛けて開設。今月23日現在で129張り、470人が利用し、他の複数の団体が開設した36張りでも132人が過ごしている。

町によると、一連の地震により、テント村付近の地盤が約1メートル沈下したという。このため熱中症のほか、梅雨に近くの川が氾濫して浸水被害が起きるのを懸念している。

町は今月中旬からチラシを配るなどして住民に移動



熊本県益城町の総合運動公園のテント村で、寝泊まりしていたテントを片付ける男性＝24日午前

を周知したが、一部で不安。孫3人を含む家族7人で避難を訴える人も。25歳の「難している富田勝子さん

(75)は「周囲に迷惑を掛けたくない」として約10日間、車中泊をした後、テント村に。「仕方ないかもしれないが、よく泣く子なので心配」と打ち明ける。

妻と小学5年の男児と生活する自営業の男性(41)も「これから暑くなるので、避難所は感染症や食中毒が心配。代替地でテント村ができるならそちらに入りたい」と話す。野口さんは「テントの熱中症対策はできると思うているが、河川の問題は重く受け止めている」と言い、民間の代替地を探しているとしている。